



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イラク：国会選挙の暫定結果と今後の見通し

(3月17日)

研究員 河井明夫

今月7日に投票が行なわれたイラク国会選挙は、投票総数約1200万票の約8割が開票・集計された16日の時点で、イヤード・アッラーウィー暫定政府元首相率いる世俗派政党連合「イラーキーヤ」が国全体でマーリキー首相の「法治国家連合」をわずか9000票差でリードしていると報じられた。

しかし県別で見た場合、「法治国家連合」は全18県中、大票田バグダード県およびシーア派が多い南部など7県でリード、「イラーキーヤ」はアンバール県などのスンナ派地域5県、シーア派色の強い「イラク国民連合（INA）」は南東部のシーア派地域3県でそれぞれ優勢が伝えられている。また、自治地域を構成している北部のクルド3県では予想通り「クルド同盟」がリードしているが、アラブなどとの間で帰属が争われている石油地帯キルクーク（タアミーム県）では、僅差ながらも「イラーキーヤ」がトップに立っている。

国会のほとんどの議席は、国全体ではなく県ごとの得票率に沿って各政党に割り当てられることから、「法治国家連合」が依然として優位ともみることができ、最終的に法治国家連合とイラーキーヤの何れが第一党になるかは予断を許さない状況である。

投票率は62.4%で、2005年12月の前回の国会選挙時の約76%よりは10数ポイント下がったが、昨年1月の地方選挙時の51%よりは高い数字となった。

全体的に見て票は各党に分散しており、どの政党も過半数の議席（全議席数325）を獲得することはできないとみられる。このため、連立政権樹立までに各政党間で粘り強く困難な協議が続けられることが予想され、新政権発足までには数カ月かかる見通しである。

今回の選挙は、今年8月末に駐留米軍戦闘部隊の撤退が予定（完全撤退期限は来年末）され、イラクが自らの手で宗派・民族対立を克服して治安の回復を達成できるかどうかを試されるなか行われたもので、イラクの将来を占う上で極めて重要と位置付けられ、国内外の高い関心を集めた。

<連立の可能性>

最終結果が確定するまでにはまだ数週間を要するとみられるが、選挙後の連立協議の行方については、「イラーキーヤ」か「法治国家連合」の何れかが、第三党に落ち着きそ

うなイラク国民連合、もしくはクルド票を手堅く固めた「クルド同盟」と連立を組むことになりそうである。この場合、元々はシーア派政党「ダアワ党」出身のマーリキー首相が宗派主義に傾き、“イランの代理人”と目される「イラク・イスラーム最高評議会（ISCI）」を中心とする「イラク国民連合」と連立を組むのを懸念する声がある。脱宗派的な連立の成立こそイラクの長期的な安定をもたらす良い機会となるとみられる中で、「イラーキーヤ」を排除する形でのシーア派大連立は、「イラーキーヤ」にその多くの票を投じたスンナ派の怒りを買うことになる。それは、前回の国会選挙後、スンナ派が味わった政治プロセスからの疎外感が宗派对立を引き起こしたように、イラクが再び暴力の嵐にさらされることになりかねない。

また、選挙前にバアス党との関係が疑われる立候補者が大量に立候補を禁止されたことで、この措置を支持したマーリキー首相は、自らを宗派主義を超越したナショナリスト的な指導者としてアピールする力を弱めてしまった。立候補禁止措置の対象になった政治家の中には、ライバル政党「イラーキーヤ」のサーレハ・ムトラク幹事長らスンナ派の有力者が含まれていた。

アラブ・クルド民族対立の観点から見た場合、両民族が帰属を巡って争うキルクーク（タアミーム県）の開票結果は重要な意味を持つ。16日の段階（開票率約69%）では、宗派横断型でナショナリスト的な「イラーキーヤ」が約13万7158票で、「クルド同盟」の約13万6896票を僅かに上回っている。クルドはキルクークをクルド民族発祥の地としてクルド自治地域（KRG）への編入を目論んでおり、「イラーキーヤ」がこのままキルクークで勝利した場合、アラブ・クルド両民族間の緊張が一気に高まりかねない。

その一方で、クルドは前回の選挙でもそうであったように今回も連立結成に当たり“キングメーカー”のポジションを維持することに意欲的である。クルド勢力を抜きにした政府はあり得ないという自負から、連立協議の過程においてクルド勢力は、キルクーク問題でアラブ側から最大限の譲歩を引き出そうとすることになる。

マーリキー首相の「法治国家連合」は、全325議席中68議席と最大の議席が割り当てられ、選挙でそれを制する者がイラク全体を制すると言われるバグダード県と、石油地帯のバスラを始めとする南部で優勢が伝えられているが、アンバール県などのスンナ派地域では余り票をとれていない。アッラーウィー元首相の「イラーキーヤ」がシーア派地域でも善戦しているのとは対照的に、「法治国家連合」の票はスンナ派地域で低調で、獲得議席数が少なくなった場合、連立のパートナーとしてより多くの政党と手を組まなければならない。そうなると、連立協議ではたった1議席といえども大きな影響力を持つ取引材料となってくる。

<開票結果発表の遅れ>

当初、選管は、投票の3日後の10日にでも開票率30%の段階での最初の暫定結果を発表するとしていたが、それが延期され、その翌日11日に発表されたのはナジャフやディヤーラなど5県のみで10%台後半から30数%の開票率での暫定結果だった。その後も数県ずつ五月雨式に暫定結果が発表され、全18県の暫定結果が出揃ったのは投票から1週間後の14日になっていた。この発表の遅れについて選管は、80を超える政党・政治団体から約6200人以上が立候補し、政党（選挙リスト）もしくはそれに所属する個人に投票する複雑な方式で投票が行われたため、コンピューター入力などに予想以上の時間を要したと説明している。

この間、「イラーキーヤ」のアッラーウィー元首相が、票の操作や手続き上の不備などがあったとして選管を非難したほか、選挙監視に当たったEUの責任者も、イランの命令でマーリキー現政権に有利なように不正が行われたことが確認されたと訴えた。

これに対して選管の報道官は、EUからのも含め、これだけたくさんの国際監視団やメディア、各政党からの立会人が開票所で見守るなか票の改ざんが行われることはあり得ないと反論した。

16日には、マーリキー首相の方も選管に宛てて書簡を送り、一部の開票監督者が「イラーキーヤ」など特定の政党と関係があることを示す情報を入手したとして、開票・集計のやり直しとともに、開票・集計所の全職員の政治的関係を洗い出すよう要求した。このマーリキー首相による不正の訴えは、同首相の陣営が当初予想していたよりも自分たちのリードが心もとないことへの危機感を示すものだという指摘もある。

不正に関する様々な主張が入り乱れる中、そうしたごたごたも含めて今回の選挙は、民主主義が根付いたばかりのイラクにとって“健全な経験”であり、民主化プロセスに向けた大事な一歩と評価する声も聞かれる。

(了)